「“用水の神” 黒井半四郎」 展示資料解説

※実際の展示順とは必ずしも一致しません

※一部、実際には展示されていない資料があります

黒井半四郎と和算

中西流算者系図（当館蔵小林家文書）

幕末から近代にかけて作成されたと考えられる中西流の系図。中西流は中西正好を祖として江戸で生まれた和算で、置賜においては米沢藩士・山田長左衛門により普及していった。本系図に記されている人物の多くは米沢藩の財政や会計を担当する役職にあったことがわかる。当時の藩士にとって和算の素養は、キャリアアップのための一要素だったのかもしれない。

本資料では、黒井の門弟の名前が他の歴代師範の門弟と比べても突出して多く記されている。黒井の門弟に係る人物が黒井顕彰のために本資料を作成したものとするのが妥当であろう。

（中西流免状）（当館蔵小林家文書）

和算・中西流の免状。相伝の算術を伝え、いよいよ慢心無く励むように、等と記す。これは寛政7年（1795）米沢藩士・佐藤九門に与えられたものであるが、授けたのは黒井半四郎であったことがわかる。黒井の名の前に6人の氏名があるが、これは中西流の祖である中西正好を筆頭に、米沢における歴代師範の名前が記されている。置賜の和算に関する先行文献では黒井は中西流師範には就いていないとされるが、弟子を取り免状を発給していたことがこの資料からうかがえる。落款を手で描いている点などから本資料は控書の可能性がある。

中西流算術小国系図（当館蔵小林家文書）

幕末から近代にかけての作成と考えられる系図。小国地方における和算の伝播の様子がうかがえる資料といえる。ここでは、小国における中西流算術は黒井によって初めて伝えられた、とされる。米沢城下同様、和算の隆盛に黒井が大きく貢献したことを伝える。

(藤田貞資による側円術の解) (当館蔵小林家文書)

本資料の包紙には、寛政年中に黒井の求めに応じて藤田貞資(さだすけ)が直筆して贈った解法である、と記されている。藤田貞資は和算家・山路主住に師事し、幕府天文方で山路の助手を務め、後に久留米藩に算学師範として召し抱えられる。久留米藩主・有馬頼僮(よりゆき)の庇護の下で刊行した『精要算法』は和算の名著とされる。

先行文献によると黒井は、藤田に師事し関流和算を学び、米沢に初めて関流を伝えた人物とされる。そのような関係もあって本資料が伝来したものと考えられる。

本資料の冒頭には朱字で「解見題折乗第十側円術」とあるが、これは和算家・関孝和の著書『解見題之法』の折乗の部の第十題、楕円の円周を求める方法を指すものとみられる。『解見題之法』に掲載された解法の更なる解釈を黒井は求めたということになるだろうか。

ちなみに、日本学士院所蔵の藤田貞資関係資料は重要文化財に指定されているが、その内『非改正論草稿』の序文の文字の書き振りは、本資料のそれと酷似していることから、本資料は包紙にあるとおりに藤田の直筆とみて相違無いものと考えたい。

算法適等之抄 (当館蔵興讓館文庫ワ 35-34)

興讓館文庫の内に伝来した和算書。巻末の記述から佐藤九門の所用であったことがうかがえる。また、この書を他見しないように、との注意書きとともに黒井の名が記されている。このことから、本書は黒井から門弟の佐藤に伝えられたものと推測できる。

九門は前出の中西流系図には佐藤九兵衛と記されており、黒井の門弟とわかる。佐藤九兵衛茂尚は藩の御国産所御用掛や御勘定頭などを歴任した。

算法位付 (当館蔵興讓館文庫ワ 35-57)

黒井門弟・佐藤九門の書写による和算書。黒井が書写した本を佐藤が再び書写したもので、黒井の名で他言他見を禁じている。巻末の記述から作者は中西流二伝(米沢における二代目師範)の長谷川伝内とわかる。長谷川の言によると、算道は「位付」を知らないとその用を足さず、先代の山田氏から相伝された「位付」に自分の寸志を加えた、という。

本書の記述から「位付」とは、算盤の桁と数量の単位の対応の仕方を指すようである。例題として、穀類1石につき銀18匁7分5厘のとき6升4合の代金はいくらかとの問いに対して、算盤の玉のはじめに配置すべき形を図示し、その後の操作方法を記しているように見受けられる。

黒井堰・飯豊山穴堰の開鑿

(黒井半四郎肖像) (当館蔵)

黒井の肖像画。印刷物。画像の上に書かれた賛には黒井の業績が漢文体で記されている。後出の『黒井翁伝並黒井渠史』によると、本資料は昭和4年(1929)に制作・頒布されたものであり、撰文は富永咬菜(本名周太)による。富永は米沢高等女学校教頭などを務め、また『上杉鷹山公』などを著した人物として知られる。

本資料の黒井の画像は、大正～昭和の作と推定される上杉博物館所蔵狩野文信画のものと同様だが、比較すると細かな相違が認められる。

余談ではあるが、黒井没後に書かれた複数の伝記の中には、黒井の容貌は宜しくなかったと記すものもある。

高玉村絵図 (当館蔵岩瀬家文書 508)

装飾性を排除した特徴的な筆致、また「黒井半四郎図之」とあることからしても黒井直筆と考えられる絵図。高玉村(現白鷹町)のほぼ全域が収められているが、描かれているのは水路や川、道などで、至ってシンプルな絵図といえる。

安永4年(1775)の年記があるが、この年は上杉家臣団による「御手伝」と呼ばれる領内の普請がおこなわれたことが知られている。黒井が高玉村周辺の御手伝普請に参加したか否かは定かではないが、仮に参加していたとすれば、この時の経験が約20年後の黒井堰開鑿に活かされたのかもしれないと、本資料から想像を膨らませられる。

高玉村と黒井との関係については、安永7年(1778)に東高玉村の別部盛重が黒井から中西流和算の免許を得たことが知られている。本資料の作成経緯とも何かしら関係があるのかもしれない。

黒井堰絵図 (当館蔵林泉文庫 119)

黒井堰の流路とその周辺を描く大型の絵図。寛政9年(1797)7月に一応の完成を迎えた時点の様子を描いたものと推測される。翌8月に藩主・治広による見分がおこなわれたことから、それに先立って作成された可能性が考えられる。

非常に細密な筆致から作者は藩絵図方の岩瀬三左衛門と考えて良いだろう。ちなみに三左衛門は寛政9年北条郷見分御用を命じられ、翌10年には「御絵図入情相勤候につき」禄の加増を受けている。

寺社仏閣や、中世以来のものと思われる居館跡など堰以外の情報が非常に豊富に描かれている。長年にわたる情報の蓄積が無いと作成することは出来なかったものと思われる。

本絵図において黒井堰は緑色で表されているが、寛政6年に開鑿された塩野方面の新堰も黒井堰の一部とされている。この堰について、今日では黒井堰に含まれないとする見方が多いが、本絵図からは当時の認識をうかがうことができる。

余談だが、本絵図と酷似した絵図が上杉博物館所蔵の上杉文書内に伝来している。2点を比較した際、基本的な情報は同じだが、博物館本には文化3年開鑿の新堰が描かれていることから、文化年間当時の様子を描いたものと推定される。

飯豊山穴堰附近地形絵図（当館蔵岩瀬家文書 548）

文政元年（1818）の穴堰竣工より前、普請最中の様子を描いたものと推測される。藩絵図方を務めた岩瀬家に伝来したもの。本紙の左から右下にかけて、穴堰の水が注ぎこむ白川を描くが、それ以上に飯豊山登拝に関する情報が豊富に描かれている。本紙下部には穴堰完成までの工期や費用などが記されているがこれは竣工後に書かれたものとみえる。本絵図作成の意図は判り兼ねるが飯豊山の中腹にあたる山深い場所に穴堰が造られたことが良くわかる絵図だといえる。

ほぼ同じ絵図が上杉博物館に所蔵されているが、そちらは穴堰周辺の普請が図書館本より進行した様子で描かれている。また、博物館本には文化8年（1811）に入植してきた木地師の集落を描くが図書館本にはみられない。そのため図書館本は文化8年以前の様子を描き、これを基に穴堰竣工後に博物館本が作成されたものと考えられる。

上堰下堰普請杉帳（当館蔵）

寛政10年（1798）作。飾り気の無い、朴訥ともいえる特徴的な筆致や、表題にも記名があることからして、黒井半四郎の直筆と推測できる。内容は、今後予定される黒井堰の普請に係る資材や人員の見積もりが記述の中心を占めている。先行文献では寛政9年に黒井堰は一応の完成を迎えた、としているが、本資料には水漏れ止めや護岸の普請などが予定されていたことがわかる。また、想定される普請箇所も多くは堰の下流にあたる地域であることがわかり、この時点では真の完成を迎えていなかったことがうかがえる。

維持管理の難しさ ～文化3年の新堰普請～

（文化三年新堰普請に関する絵図）（当館蔵林泉文庫 120-1-2）

文化3年（1806）5月、黒井堰下堰に繋がる新堰が竣工した。これにより取水先は従来の砂川から松川（最上川）へ変えられた。本資料は新堰の流路にある入生田村に藩から渡された絵図である。絵図から、新堰は露藤村内の最上川から取水され、糠野目・入生田を経て従来の取水口であった鶴巻まで接続されたことがわかる。裏面には米沢藩と入生田村

との間で取り決められた内容が記されている。そこには新堰に係る地所への税の半減や、堰周辺に生える草の利用を村に認めることなどが記されている。

本絵図の作者については他の史料から岩瀬三左衛門によるものと推測される。新堰とその周辺の情報のみを記せば本資料の目的は十分に果たせるはずだが、そこまで描かなくても、と思わせる程に広範囲にわたる情報が描かれている点に代々絵図方を務めてきた岩瀬家の矜持が感じられる。

本絵図と前出の寛政年間の絵図（林泉文庫 119）を比較すると、竣工当初の下堰は最上川から取水していたが、寛政 11 年に大規模な瀬替がおこなわれ最上川の流路が西に曲げられた結果、砂川から取水する形になったことがうかがえる。文化 3 年の新堰普請は、下堰の取水先を再度最上川に変更する意図があったものと考えられる。

黒井渠再興御普請ニ付大概申上候覚（当館蔵林泉文庫 120-2-6）

文化 3 年（1806）8 月、新堰普請を担った一人・服部与右衛門が記した普請の経緯。当年 3 月 8 日から掘削が始められ、5 月 18 日に普請の成就が藩に報告されたことがわかるが、その前日にあたる 5 月 17 日に「黒井半四郎水霊祭」が福沢村喜多院（現高島町）で執り行われ、半四郎の子・亀次郎や水下の村々の役人が参加したことが記されている。この時点において黒井は堰普請の功労者という枠を越え、半ば神格化されていたことがうかがえる記述といえるのではなかろうか。

他にも本資料からは、掘削の最中や竣工後において小規模な水路の崩落が複数回発生していたこともわかる。短期間で成就した工事ではあったが、堰を通す上ではかなり難しい場所であったことがうかがえる。

差上申一札之事（当館蔵林泉文庫 120-2-2）

文化 5 年（1808）、幕領で米沢藩預所の露藤・入生田両村から亀岡の預所役所へ宛てられた書状。ここには新堰が廃止になったため、村へ渡されていた絵図や書類を藩へ返却すること、藩から両村への年二俵の米の支給も取り止められたため、今後は村による堰周辺の見回りも止めることを伝えている。新堰は文化 3 年の竣工からわずか 2 年で廃止に至ったことがわかる。

語り継がれる功績

飯豊山穴堰記（当館蔵林泉文庫 627）

穴堰の普請に関わる諸資料を採録したもの。この中に文政元年（1818）の穴堰竣工時に普請奉行を務めていた大石豊綱の日記の一部が「石老日記抄」と題され収められている。

文政2年5月15日の日記には、穴堰の完成によって長堀堰の水量は確実に増えたが、その水をどの地域へ回すべきか、この時点では藩内でも結論が出ていなかった様子がかがえる。藩内の議論では、起工当初の黒井の計画では用水を奥田村（現川西町）まで回すことで多分の新開地が出来ることを想定していたが、黒井が亡くなったためこの計画は実現出来なかった、としている。ことの真偽は判り兼ねるが、当時において黒井が比類なく傑出した人物だったと認識されていたことがうかがえる記述であるといえる。

黒井が想定していたという奥田村までの引水は叶わなかったが、長堀堰の用水は高山村（現川西町）方面へ供給されることが決まり、文政3年に高豆蔻・黒川・高山の三村から堰への加入申請が藩に提出された。

飯豊の山ぶみ（当館蔵）

天保11年（1838）成立、米沢藩士・泉崎賢親の紀行文。友人らと連れ立って飯豊山を登った際の道中で見たものを記す。この中に飯豊山穴堰について触れられている。ここでは、取水口と出口の二方向から掘り進められた穴は文政元年に繋がったが、黒井の計画と露も違っておらず、今でも人々から賞賛されている、としている。

所々に入る挿絵は佐藤秀臣による。穴堰も取水口周辺の景色が描かれている。

飯豊山は置賜有数の山岳信仰の地として多くの参詣者を集めていた。伝承によると、奥田村（現川西町）の横山平左衛門は飯豊山参詣の折、玉川を流れ越後へ向かう水を白川へ送ることを思いつき黒井に提案した、という。

本藩中興名臣録（当館蔵鶴城叢書42）

鷹山を支えた主要な家臣の伝記集の写本。原著は幕末から近代にかけての成立と考えられる。本書編者の甘粕継成は藩の御記録所頭取などを務めた。

黒井を取り扱った章は、黒井を藩勘定頭へ推挙した柳町清兵衛の逸話から始められているが、記述は黒井の死後の出来事にも及んでいる。嘉永2年（1849）、御廟町で起こった火災により館山口町の黒井家も類焼してしまったが、この知らせを聞いた北条郷の農民たちは「先代の半四郎君は実に我三十余村の父母なり」と、競って金銭や資材を黒井家に寄附して再建に協力した、とする。また、北条郷では黒井は水神と崇められ、早魃の際には必ず黒井堰の石碑のもとで祈祷を執り行っている、とも記す。

米沢新聞大正7年11月20日付2面（当館蔵）

従五位の官位が贈られることになった黒井の業績を伝える。この中でも、福沢村では村内に建立した黒井顕彰の石碑を水神として祀っているとしている。

贈位について、国立公文書館所蔵の公文書からは明治時代には既に、黒井を推薦する動きがあったことがうかがえる。

米沢新聞昭和6年4月10日付2面（当館蔵）

春の上杉神社例大祭にあわせて、郷土館に「三偉人」の展示会を催すことが決まったことを伝える。この年に没した山下源太郎・海軍大将と上杉鷹山、黒井の三人を三偉人と称したことがわかる。

続報によると4月29日の開催初日には約1500名の入場者を数えたという。

少年少女やまがた人物風土記2（当館蔵 K281.2/ヤ）

昭和62年（1987）刊行。表題からもうかがえるが、山形ゆかりの人物の功績を児童・生徒に伝えるべく、県内の学校関係者らによって作られた本で全5巻からなる。黒井の業績は「置賜の野に水を」と題し、平易な文書で綴られている。黒井の章の挿絵は小林秀美の作。小林は大正5年（1916）白鷹町の生まれで、挿絵画家として活動した人物。平成3年から17年にかけて、日本文芸家クラブ会長を務めた。

米沢こども新聞22号（当館蔵 K370/Yo/22）

昭和34年（1959）12月発行。地域にゆかりの人物を紹介する連載記事「郷土に光をかかげた人々」にて黒井が取り上げられている。こども新聞の記事だけあり、老若男女問わず読み易い文章になっている。文章は上村良作、挿絵は高森務による。

黒井半四郎と地域づくり（当館蔵 K614/コ）

平成16年（2004）刊行。著者の香坂文夫氏は土木技術や都市計画を専門とし高校教諭として長年に亘って教壇に立った。そのため本書は、図表を多用しながら黒井の業績を紹介し、加えて今日に至るまでの治水・利水事業の歴史を著している。

川柳から郷土史まで ～三瓶耕童の黒井研究～

贈従五位黒井忠寄翁略伝（当館蔵 K289/Sa）

編集発行・三瓶耕童、昭和5年（1930）刊行。黒井の功績とともに、喜多院の堰碑銘、高国寺の墓碑銘を記す。巻末には昭和4年に三瓶が主催した、黒井顕彰の川柳会における入選作を掲載している。この川柳会で募った川柳は、額にして喜多院に奉納された。

黒井翁伝並黒井渠史（当館蔵 K614/Sa）

三瓶耕童著、昭和13年（1938）刊行。序文に「東奔西走すること11か年、得たる所の資料を基礎とし」とあり、三瓶の研究の集大成的一冊となっている。内容は黒井や黒井堰のみに留まらず、北条郷の利水・治水の歴史にまで至る。

使用されている史料は今日では所在の確認が出来ないものも散見される。本書は三瓶自身が各地を巡り史料採録を繰り返した末に完成した労作といえるだろう。

飯豊山穴堰之絵図面並ニ沿革（当館蔵 K614/Sa）

昭和5年（1930）、三瓶耕童による。穴堰の取水口と出口の周辺、山中のトンネルを描き、昭和4年の大修理までの沿革も記す。

絵を描いた人物は不明だが、素人の作ではないようにみえる。また印刷も多色刷りを採用しており、三瓶個人の趣味や善意で制作されたものとはにわかには考えにくい。何らかの事業の一環として作られたものと考えるのが妥当に思われる。昭和4年、長堀堰普通組合が組織され、穴堰の管理経営を担うようになったことと関係があるのかもしれない。

飯豊山穴渠沿革史（当館蔵 K614/Sa）

昭和7年（1932）、三瓶耕童著。二十年にわたる穴堰竣工までの歴史をまとめる。巻末には穴堰と長堀堰の功労者がピックアップされており、菩提寺や没年、戒名などが記されている。

上杉藩ノ長堀堰管理行政並ニ飯豊山穴堰昭和ノ大改修（当館蔵 K614/Sa）

昭和11年（1936）、三瓶耕童著。今日では読み難い長堀堰関係の古文書を読み易くして、更にこの年まで行われた穴堰改修工事の顛末を略記した、と序文に記す。長堀堰関係の史料としては嘉永年間に作成された由緒書、弘化年間の分木（用水の分水点に立てた杭木）に関する書上などを収める。

（文責：宮澤崇士）

主要参考文献（展示資料は省略した）

- ・黒井堰史編纂委員会『黒井堰史』、1982年、当館蔵 K614/く
- ・大木善太郎『会田安明翁事蹟並山形県の和算家』、1933年、当館蔵 K419/O
- ・山形県和算研究会『山形の和算』、1996年、当館蔵 K419/ヤ
- ・千喜良英二『山形県諸藩の和算』、2003年、当館蔵 K419/チ